

北村泰一さんの思い出

徳田八郎衛（1961 電磁気）

1 7年も先輩の方と友人に

北村さんは新制大学の2期生、つまり1954年卒の大先輩である。私が高2になった春、新卒のフレッシュ教員が何名か郷里の高校へ着任されたが、その「センセイ」たちと同期なのだ。その大先輩と生涯の友人のような関係になってしまった。理由は、北村さんが大学院生のまま、第1次南極観測隊員に、続いて第3次隊員に選ばれ、しかも、どちらも越冬隊員となったので大学院卒業が遅れてしまったからである。我々が卒論に取り組む1960年夏、その春に帰国した第3次越冬隊員としての報告書作成を終えて東京から京都へ帰ってこられた際にご挨拶したが、第5講座としての特別の歓迎会はない。犬係として、あれほど苦労されたことは国中に知れ渡っているから、私には少し意外であった。

北村さんのご同期で測地の中川一郎さん、気象の佐橋謙さん、地震の加茂幸介さん等はまだ助手に任官して「先生」なのに、今から博士課程の卒論をまとめられる北村さんは「さん」付けで気の毒だったが、「いつまで経っても上等兵になれない一等兵を、周囲が気を使って古兵殿と呼んだけど、僕なんか正に古兵殿だよ」と笑わせる。ざっくばらんなお人柄が災いして(?)、すぐに友達のようになってしまった。その最たるものは10月に瀬田川でボート部が開催する「素人レガッタ」だ。「〇〇高校出身」「茶道部」など、どんな団体でも参加できる。4回生を中心に「地球物理クルー」を結成して参加することになり、有名人の北村さんを誘ったら、勿体つけず直ぐに応じて下さった。

だいが多忙なのか出場の待機時間にも腹這いになって依頼原稿を書いておられる。ご同

期で、理化学研究所から第4次越冬隊員として南極観測に参加された福島紳隊員がブリザードの昭和基地で行方不明になったと報じられた直後なので、その関連かと心配したら、2日後の全国紙と地方紙（京都新聞）に、北村さんの追悼文が掲載された。「ご心痛、そしてご多忙な時にレガッタなんかへお誘いして申し訳ございませんでした」とお詫びしたら「ご心痛の時だからこそ癒されて助かったよ。ぼくは山岳部やから、あんな体験させてもろて良かった」と笑って下さった。

私も院生になり学会へ参加するようになると帰りに山へ登り始めた。それを知った北村さんが「同好の士だね。一緒に夜行で上高地へ行き、見晴らしのいい蝶が岳と常念岳に登ろうか」と誘って下さった。天幕や飯盒炊飯の規制が今ほど厳しくない時代だったので楽しい思い出となったが、南極観測について様々な「雑学」も教えて頂き、それが後で役に立った。二度も越冬されたのだから研究者としての参加だと思っていたら、「僕は設営要員だよ。京大地球物理学教室から参加したのでなく、京都学士山岳会から参加したようなものです」と説明されたのには驚いた。「日本人としては初の南極越冬なので冒険的な要素が大きいとはいえ日本学術会議からの派遣だから学術を軽視しては困る」とか「最初の年は越冬体験中心にして学術は2年目からやれば良い」とか様々な提案が乱立し、永田隊長も困っておられた、という政策論争も興味深かった。

犬橇隊の編成にも「遊びに行くのか」「今はアムンゼンの時代ではないぞ」の反対があったが日本の雪上車は故障続出で、内陸調査には犬橇隊が不可欠だったと自負された。本当は研究室で毎週行われる「雑誌会」で話して頂きたい話題だが、冒険・探検的な話題は意図的に避けておられたのかも知れない。1976年1月、防衛庁技術研究本部で勤務する

私は、評判の悪かった雪上車に代わる新雪上車を吹雪のオホーツク海岸で走らせていた。

78 式（南極用 SM50 型）雪上車の耐寒性能試験だ。搭載通信機担当の私は比較的暇だ

が、主役となるエンジンやキャタピラの担当者たちは計測データの記録や装置の手直し

で大忙しである。そこへ学術会議南極特別委員会の西堀榮三郎元越冬隊長が激励に来られ

るとのこと。「徳田は暇そうだし、西堀先生と面識もあるだろう。浜頓別駅へお迎えに行

ってこい」となったが、西堀さんの接遇には、北村さんから聴いていた南極雑学が実に役

立った。

2 チャプマン先生接遇で助けられる

1961 年 9 月、京都市岡崎の国際会館で日本では戦後初の大規模な国際会議となる「国

際宇宙線・地球嵐会議」が開催された。ノーベル物理学賞のパウエル博士（英）、磁気流

体力学の開拓者アルヴェーン博士（スウェーデン）、宇宙線の権威ベルノフ博士（ソ連）

など 27 カ国の外国人学者約 200 人、日本の湯川秀樹京大教授や元南極観測隊長永田武東

大教授ら 260 人が集まり、それまでほとんど非公開だった米ソ両国のロケット・衛星に

よる宇宙観測の成果や国際地球観測年の成果が次々と発表された。

まだ発表者になれない院生は、無給の大会運営係、すなわちスライド係だ。絶えず

Topside Down!と叱られる。修士 1 回生の私などは「自分の下」といえば床板しかなく、

昼食どころではない。そして 1 週間後、私は、大会委員長を務める国際地球観測年総裁シ

ドニー・チャプマン・オックスフォード大名誉教授（英）のお世話役を命じられる。会議

場では伝令である。まだ携帯電話も FAX も電子メールもない時代だから・・・夜は和風宿舎

に泊るチャプマン先生の控えの間で宿直だ。「もっとヒアリングが上手で、もっと気の利

く人に換えて下さいよ」と前田担助教授に泣きつくと「徳田君は、長谷川万吉先生（日本代表委員で4年前に地球物理学教室を定年退官、当時は福井大学学長）のお眼鏡に適ったんだよ。今から増えてくる国際会議の訓練に・・・」と素っ気ない。

気の利かない私でも居ないよりはまし、と思えたのは、第2室戸台風が京都を襲った最終日の夜である。停電で怯えておられるチャプマン先生と一緒に雨戸を必死に押さえたのは体育会系の私だった。台風一過の翌日は日曜日だが市電も動かず、名所も閉鎖されている。馬術部へお連れして馬と戯れた後、地球物理学教室の前まで来たが施錠されているから入れない。「台風被害の確認に誰か出勤しないかなあ」と待っていると現れたのが北村さん。正に「地獄に仏」で、要人の接遇をお任せし、私はカバン持ちとなった。やがて叡電が動き出し、チャプマン先生を八瀬の釜風呂へお連れしたのも楽しい思い出である。

3 最期までロマンティストだった北村さん

やがて北村さんは同志社大学工学部講師となり、研究室を訪れると「空間研究室」の札が掲げられていた。「宇宙空間にしては？」と訊ねると「ここ、工学部だから宇宙だとか南極とか大声で言えないんだ」とのこと。だが人柄を慕って、学生は大勢集まっていた。高度成長が始まり理工系は引っ張りだこだから、卒業研究が「空間？」でも就職には影響しなかったのだ。そのうち私は大学院を終えて東京で勤務するが、学界活動で一緒すると、磁力計担いで各地を測定して回っておられるのが判った。科研費申請の会議で、衛星搭載機器の研究が優先されるのを牽制し「最近、空軍ばかり大切にされるが、我々陸軍の面倒も見て下さい」と声を挙げられたのが忘れられない。

やがて九州大学理学部地球惑星科学科教授となられるが、人文科学である古代学への興

味がどんどん昂じてきたようだ。お会いする機会は非常に少なくなったが、出会うと「日本人はどこから来たか。天皇家はどこから来たか」の議論となる。私も、オペレーションリサーチ（OR）やシステム分析（SA）を駆使して「最良の費用対効果」をクールに追求する組織の中で「貴方はロマンティストだね」と絶えず冷やかされてきたが、北村さんも「とにかく南極へ行きたい」と行動された20代と変わらぬロマンティストだった。

最後に北村さんが追ったロマンは泰緬（たいめん）国境の山地だ。彼の説明によると、1945年初夏、英軍にビルマを奪還されタイ王国へ敗走する日本軍の撤退路は3本しかなかった。いずれも親日的な現地人の助けで栄養失調の日本軍将兵は無事に穀倉地帯へ逃げ込めたが、右と左のルートには生き延びた将兵の手で感謝の碑が建っているのに、真ん中のルートだけは何もない。あの戦争について何も知らないまま泰緬国境まで脚を伸ばす気楽な日本人観光客に現地でファクトを伝え続け、念願の碑を建てるまでに現地で他界した同志社時代の教え子の霊に伝えようと古希を過ぎた北村さんは行動する。

戦史研究に伝手（つて）のない北村さんは、「戦史関係の著書あり」という理由だけで私を買いかぶって下さり、通過部隊の名称や戦友会について矢継ぎ早の質問を送ってこられるが、「歩兵16連隊？それは新発田の部隊です。今は陸上自衛隊の第30普通科連隊がそこに居ますから、戦友会の手掛かりを教えてください」程度は応えられても、詳しい質問にはお手上げだ。そこで紹介したのが靖国神社境内にある「偕行文庫」だ。偕行社の出版物や寄贈された従軍記などが閲覧できる図書館だが、交戦した英国軍や共闘した印度国民軍の記録も続々贈呈され、マレー戦線やビルマ戦線の研究には資料の宝庫である。また現役時代に防衛研究所戦史部（今は戦史研究センター）で戦史編集官として勤務した博識

の研究者の中から適任者が選ばれて来場者への助言に当たっている。早速、文庫の存在を伝え、永年、懇意にしてきたアドバイザーを紹介すると、熱心な北村さんは、チベット高地での高山病で病んだ不自由な身体を庇いながら、度々偕行文庫を訪れて通過部隊を調べ上げ、教え子の悲願を成就させるべく奮闘された。

残念ながら八十路を迎え介護施設へ入居されたので夢は叶わなかったが、八十路までロマンを追い続けたのは流石に北村さんだと脱帽した。2025年12月2日、京都で理学部同期の仲間と最後の同期会開催中に、北村さんが前日他界されたのを極地研究所の南極関係者と京都学士山岳会との2つのルートから伝えて頂いた。この2つのパイプは最後まで大切にされたのであろう。思わず西の空へ手を合わせた。京都真如堂の鐘が鳴った。

(終り)



蝶が岳・常念岳登山の北村(1962.10.17)



蝶が岳・常念岳登山の徳田(1962.10.17)



瀬田川での素人レガッタに地球物理チーム出場(1960.10.16)



国際宇宙線・地球嵐会議でのチャップマン大会委員長
と長谷川日本代表委員(1961.9.4)